

江戸上り下りの船中にて、四書をよませて聞給ひけるが、ある時伏見にて、論語に「自手朱引を致給ふを、子飼の猿が、常々傍に居てつく／＼と見けるが、清正用有てた、れたる跡にて、此猿筆に朱を付、論語にめたと塗付たるを見給ひて、上古より猿は見る事學と見へたり、昔有僧終南山に隠る時に袈裟を失す、猿これを盗み、其身にきて岩上に座禪す、群猿これに効て座禪す、此猿たはふれに袈裟をかけ、人まねに座禪したれども、其功德によつて成佛したるときけば、此猿もわるさに、論語に朱を付たれども、少は聖人の道にかなふべきかと宣て、一笑し給といふ物語を、小耳に聞ける間、武勇一偏の大將にては無事必せり、

〔関田耕筆<sup>三</sup>〕兒島尙善醫士語られしは、京師より丹波路を経て播磨に歸る山中にて、うち向ふ所物騒がしく、何ならんと見れば、猿どもあまた集りたるが中に、藤かづらやうの物にてあみたる畚のごときものをすゑて、かはる／＼たちより菓などあたへなぐさむるさま也、内には老さらぼひたる猿ほのかに見ゆ、子うまごども是につかふるとえられて、みづからも母の親もたれば、こと更に感じて、かへるみちのいとゞいそがれしとなり、形人に近ければ、其情も亦近き成べし、されば是を畜もの、伎藝を教れば馴てよく起舞せり、

〔新著聞集<sup>二</sup>慈愛〕猿子親を療して人心を感發す

信州下伊奈郡入野谷村の者、冬の日獵に出、不仕合にて歸る道の大木に大猿の居たりしを、これ究竟の事なりとて討とり、夜に入宿につき、明日皮を剝なん、凍ては剝がたしとて、圍爐裏のうへに釣おきぬ、深更に目をさましみれば、いけておきし火影みへつ隠れつするを不審しくおもひ、能々うかゞひみれば、子猿親の脇下にとりつき居けるが、一匹づゝかわる／＼おりて火にて手をあぶり、親猿の鐵炮疵をあた、めしを見るより、哀さかざりなくて、我いかなれば身一ツたてんとて、かゝる情なき事をなしつと、先非を悔て、翌日頓て女房にいとまとらせて、頭をそり世を